福島区の歴史を巡るフィールドワーク（堂島大橋）にて（写真提供:井形さん）

福島区歴史研究会事務局長
郷土史家

井形正寿（いがた まさとし）さん

プロフィール

1921年、大阪市生まれ。市立難波実業学校卒業後、日本通運大阪支社勤務を経て43年、大阪府警察官に。福島署勤務から府警本部を経て八尾署で終戦を迎える。50年に現在の福島区鷺洲に転居し、まもなく不動産業を起業。61年から福島地区土地区画整理審議会委員・会長や福島区史編纂委員・執筆委員などを歴任。現在も大塩事件研究会副会長、「大開町と松下幸之助事業委員会」副会長などでも活躍中。00年、図書館の読書環境整備事業への協力など教育文化推進への功績に対して大阪市教育委員会教育長表彰。

人間、一生が学習ですよ

福島区役所と隣接する区民センター3階の市立福島図書館。館内の一角に「福澤諭吉記念室」がある。現在は、福島区で生まれ北浜の適塾で学んだ福澤諭吉の企画展「福澤諭吉に学ぶ―生誕百七十年記念―」（福島図書館・福島区歴史研究会共催）を開催中だ。共催している福島区歴史研究会の事務局長が、郷土史家としても活躍する井形正寿さんである。

井形さんらによると、福澤諭吉記念室は、福島区歴史研究会や区民の要望を受け、1987年に図書館のオープンと同時に開設された。

その後記念室では、諭吉関連の著作や関連写真などを展示する一方、福島区歴史研究会が中心となり、「野田」「大開」「鷺洲」など各地区の歴史展のほか、福島ゆかりの人物を特集する「大塩平八郎と民衆」や「福島と松下幸之助」などの資料展をこれまでに50回以上開催。関連した地域を巡る「歴史散歩」や、資料展に合わせた「講演会」も年2、3回ペースで開いており、そのいくつかは町づくりのイベントなどに生かされている。開催中の「福澤諭吉に学ぶ展」にあわせ、6月4日に開催される樟蔭東女子短期大学名誉教授・森田康夫さんによる講演会「福澤諭吉と大坂」なども、同会と図書館による関連事業の一環である。

記念室誕生に尽力した井形さんが、仲間の郷土史家らとともに福島区歴史研究会を立ち上げたのは、福島図書館がオープンする数年前のこと。愛着のある福島で、郷土から出た福澤諭吉や松下幸之助があまり高く評価されていないことに憤りを感じたためだ。

もともと、「小説を書いたり、同人雑誌をやったり、自分で言うのもなんですが、文学青年だった（笑）」という井形さん。大阪・桜橋の日本通運時代は、「休日ともなれば上町台地を散策してお寺の歴史を調べ、織田作之助の『夫婦善哉』を読んでは法善寺横丁を尋ね、ゆかりの店で食事のあと、洋画を見て帰る」ことを楽しみとする青春時代をすごしていた。

そればかりではない。探究心も極めて旺盛で、「何かに興味を持つと徹底的に調べ、関連資料を集めまくる」という性格。めざす収集品も「オリジナルな第1次資料」というから、半端ではない。そうした第1級の資料に裏づけされた知識が、井形さんを支えているのである。

郷土史家としてまた、商店会や町づくりの役員として多忙な井形さんだが、「人間は一生が学習ですよ。何かをやっていれば得るものがあり、何もしなければ何の成果もない。また学んだものを社会に生かせなければ、学んだ意味がありません」ときっぱり。今後も調査や、研究成果の公開を続ける一方で、同図書館で恒例行事となっている「戦争体験を語り続ける資料展」にも全力を注ぎたいという。

先月24日に満84歳を迎えた。健康法は、「約5キロを1時間10分から20分かける毎日のジョギングと粗食、それにゆっくりあったまれる銭湯。あと、60年食べ続けているチーズやね」と目を細める井形さんの、ますますの活躍に期待しよう。

（文・脇本勤／表紙写真・高島悠介）